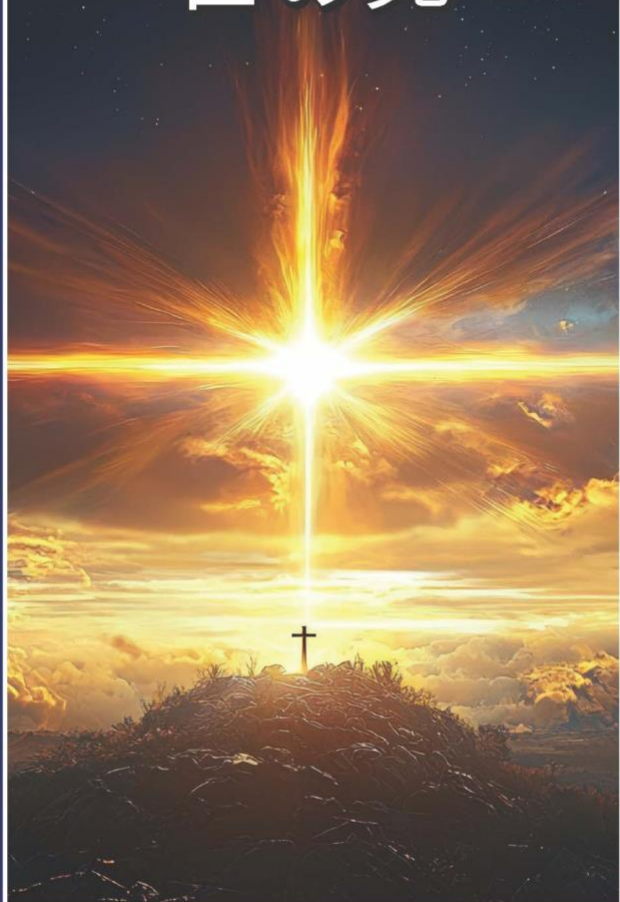


世の光



世の光

「あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。そうすれば、人々はあなたがたの善い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになる。」

マタイによる福音書 5章16節

聖書において、「闇」とは、神からの分離、および神ご自身や人類に対する神の御心に関する知識の欠如を象徴するものとして用いられています。「神は光であり、神には闇が全くない」とヨハネによる福音書では記されています。

（ヨハネによる福音書1:5）。御言葉を通して御自身を啓示される神を知り、神の御心を行うよう努めている人々は、聖書において「光の中」を歩む者として描かれています。それ以外のすべての人々は、「闇の中」を歩んでいるとされています。ヨハネによる福音書1:6,7

この象徴的な闇は、罪のために人類の上に降りかかった。私たちの最初の両親こそが、最初の罪人であったからだ。彼らは神の律法に背くことを選び、そうすることで自分自身とすべての子孫に死をもたらした。パウロはこう記している。「一人の人の不従順によって、多くの者〔すなわち、全人類〕が罪人となった。」

（ローマ人への手紙5:19）。これは、エデンの時代以来、「闇」が地球を覆ってきたことを意味します。実際、預言者ダビデはこれを夜間の体験として言

及し、「泣きは一晚続くかもしれない」と記した後、安心させるような約束として「朝には喜びが来る」と付け加えています。詩編30:5

この長く陰鬱な夜の間に、人々の大部分が神を離れ、希望を失っていたときにも、神は地上に御自身の証人たちを置かれました。彼らは、神の手が彼らに臨んだことによって、あるいは神に関する自らの忠実な証しによって、暗闇の中の光となってきました。これらの証人たちは、神に関する真理を相当数の人々に納得させたことは一度もありませんでしたが、神を見つけ、仕えようと真剣に努力して神を求め続けた人々にとっては、しばしば道しるべとしての役割を果たしてきました。使徒言行録17:27

大洪水の時代にさかのぼると、当時、ノアが全能の神、すなわち創造主の証人であったことがわかります。使徒ペテロは、ノアが「義の宣教者」であったと教えています。（ペテロの手紙第二2:5）。彼は当時の世界を改革したわけではありませんが、神と、迫り来る大洪水に関する神の御計画について証しをしたため、その世界における光となりました。ノアが神と義のために取った立場は、大洪水の到来によってその正しさが証明されました。

イエスの初臨に先立つ何世紀にもわたり、神は御自身の証人たちの生涯において、奇跡的な方法で守り抜く御力を示され、それによって彼らの証言の効力はさらに高まりました。主は預言者イザヤを通して、「あなたに対して造られるいかなる武器も、成功

「世の光」

することはない」と約束されましたが、これは古代におけるすべての忠実な証人たちに関して、文字通り真実でした。イザヤ書 54:17

ヨセフの敵たちは彼を奴隷としてエジプトに売ったが、神の驚くべき摂理によって、彼はエジプトの支配者となり、民の救い主となった。これは、ヨセフの神の力と栄光をどれほど見事に示したことか！

ヨセフが神について長い説教をしたという記録は残っていません。彼の

な信仰に満ちた生涯と、時折、自分の信仰を明らかにするために語った「時宜を得た言葉」は、彼がどんな長々とした説教をしたとしても、それ以上に雄弁なものでした。とりわけ、神が公然と彼の信仰を正当化し、その忠実さに報いてくださったからです。

その後、ヨセフを知らないファラオがエジプトで権力を握ると、当時その地に住み、その数を大いに増やしていたイスラエル人は奴隷とされました。主の摂理により、モーセが彼らを救い出すために立てられました。モーセとアロンがファラオの前に現れ、イスラエル人の解放を要求したとき、神の御名と栄光がかかっていたのです。

モーセ自身には、民に対する主の御計画を成し遂げる力はなかったが、彼は忠実に主の側に立ち、主の御名によってイスラエル人の解放を要求した。その結果は周知の通りである。次々と災いがエジプト人に降りかかり、ついには長子の死がもたらされた。

そこで王はヘブライ人の子供たちに国を去るよう命じ、彼らはその通りにした。

しかし、ファラオは心変わりし、イスラエル人を再び捕らえるために軍隊を派遣した。再び主が介入され、民のために紅海に道を開き、追いかけてきたエジプト軍を海の水が飲み込むようにされた。

そして、あの荘厳な救いの歌が響き渡りました。「わたしは主に歌おう。主は栄光に満ちて勝利を収められた。主は馬とその騎手を海に投げ込まれた。主はわたしの力、わたしの歌、わたしの救いとなられた。」出エジプト記15:1,2

神がご自分の民のために戦い、救い出す力をお持ちであることを示すこの輝かしい証しにもかかわらず、イスラエル人は、約束の地へと進み出てそれを占領するために、神に全幅の信頼を置くほどには感銘を受けませんでした。彼らは、カレブとヨシュア記という二人の忠実な偵察者の報告を拒絶し、カナン人をその地から追い出そうとする試みに反対する投票を行いました。このため、神は彼らを四十年間、荒野をさまようように許されました。

しかし、神は奇跡的に彼らを養ってくださった。天からマナを与え、岩から水を湧き出させて彼らを癒やしてくださった。また、礼拝の中心となる幕屋も与えてくださった。その間ずっと、モーセがイスラエル人に思い起こさせたように、「この四十年の間、あなたがたの服はすり切れることもなく、足に水ぶくれができたり腫れたりすることもなかった。」

「世の光」

（申命記

8:4）。モーセは、荒野の旅の間、民を顧みてくださったのが主であることを知っていたが、彼らがそれを忘れてしまうことを恐れ、「主は、広大で恐ろしい荒野、渇きと水のない地、毒蛇やサソリのいるその地を、あなたがたを導き通された。主は、堅い岩から水をあなたがたに与えられた」と彼らに思い起こさせた。申命記 8:15

イスラエルのためにこれらのことをなされたのは主であり、それゆえ、主が彼らに与えられた御業を通して、また彼ら自身の信仰の欠如にもかかわらず、彼らは主の証人として用いられていた。このことは、ヨシュア記の下、また別の奇跡によって、主が彼らにヨルダン川を渡らせ、約束の地を所有させるよう導かれたときにも、変わらず真実であった。

崩れゆく城壁

カナンに入った直後、イスラエル人は要塞化され、城壁に囲まれたエリコの町に直面した。

この町を攻略するまでは、その地を所有する上で何の進展も望めなかったが、彼らには自らの知恵や力だけではこれを成し遂げることはできなかった。すると、「ヨシュア記がエリコの近くに来たとき、顔を上げると、目の前に剣を抜いた男が立っているのが見えた。ヨシュアは彼に近づき、『あなたは我々の味方か、それとも敵か』と尋ねた。」ヨシュア記5章13～15節

抜刀したその男は、自らを「主の軍勢の司令官」、すなわち主の天使の軍勢であると名乗った。主の使者として、この「男」はヨシュアに、エリコを攻略するために用いるべき戦略を説明した。ヨシュアはその指示に従い、すると町の城壁は彼らの目の前で崩れ落ちた。「こうして、主はヨシュアと共におられ、その名声は全地に広まった。」ヨシュア記6:27

主に栄光をもたらしたもう一つの日覚ましい勝利は、ギデオンがわずか三百人の小部隊でミディアン人を打ち破ったことである。ここでもまた、勝利を収めたのは主であった。ギデオンの三百人は、指導者の指示に従って土器を割り、暗闇の中に松明の光を放ち、ラッパを吹き鳴らし、叫んだ。

「主の剣、ギデオンの剣」と叫んだとき、「主は、ミディアン人の全軍において、一人ひとりの剣をその仲間に向けさせられた。そして、その軍勢は逃げ去った。」士師記 7:20-22

エホバこそが神である

神は預言者エリヤを通して、極めて際立った方法で御自身の栄光を現されました。アハブ王の妻イゼベルの影響により、イスラエルはバアルへの偶像崇拜へと導かれていました。主の導きにより、エリヤはカルメル山で試練を行う手配をし、エホバとバアルのどちらが真の生ける神であることを明らかにしようとなりました。

天から火を降らせて、自分に捧げられたいけにえを焼き尽くす方が、真の神であると合意された。

「世の光」

その日、カルメル山とその周辺には膨大な人だかりができた。エリヤはバアルの祭司たちに先に実演を行うよう強く求め、彼らはそれに応じたが、何の成果も得られなかった。

彼らは一日中、苦悩しながらバアルに叫び求めたが、バアルは応じなかった。エリヤは彼らを嘲って言った。「もっと大声で叫べ！

彼は確かに神なのだから！

もしかすると、深く考え込んでいるか、忙しいか、旅に出ているのかもしれない。あるいは眠っていて、起こさなければならぬのかかもしれない。」列王記上 18:27

バアルの祭司たちは、「夕のいけにえ」の時刻になるまで、自分たちの神に向かって苦悩に満ちた叫びを続けました。それからエリヤは、民に近づいて、自分が行う試みを見守るよう招きました。彼は祭壇を築き、その上にいけにえを置きました。そして、いかなるごまかしも行われていないことを示すために、祭壇の周囲に溝を掘り、そこに水を満たして、祭壇といけにえを水でびしょ濡れにしました。それからエリヤは祈りました。

「主よ、アブラハム、イサク、イスラエルの神よ。今日、あなたがイスラエルの神であり、私があなたのしもべであり、あなたの命令に従ってこれらすべてのことを行ったことを、明らかにしてください。主よ、私の声を聞いてください。答えてください。そうすれば、この民は、主よ、あなたが神であり、あなたが彼らの心を

再びあなたの方へと向かわせていることを知るでしょう。」列王記上 18:36,37

神がご自身の民の前で御名を明らかにしてくださるよう願うこの雄弁な祈りに応えて、火が降りてきて、全焼のいけにえと、木と、石と、塵を焼き尽くし、溝にあった水までも舐め尽くした。民は皆、それを見て、顔を地に伏せて、「主こそ神である。主こそ神である」と言った。列王記上 18:38,39

アッシリア軍の壊滅

ヒゼキヤ王の治世中、アッシリアの王センナケリブは侵略戦争を仕掛け、エルサレムの降伏を要求した。彼はヒゼキヤに使いを送り、降伏を求めたが、その要求は受け入れられなかった。そこで、使いが再び遣わされ、次のようなメッセージが伝えられた。

「あなたがたが頼りにしている神が、『エルサレムはアッシリア王の手に渡されることはない』と言っても、その言葉に惑わされてはならない。アッシリアの王たちがすべての国々に何をしたか、すなわちそれらを完全に滅ぼしたことは、きっとあなたがたも聞いているはずだ。

それなのに、あなたがたは救われるというのか。私の先王たちが滅ぼした諸国の神々——ゴザン、ハラン、レゼフ、そしてテル・アッサルにいたエデンの民の神々——は、彼らを救ったのか。ハマテの王やアルパドの王はどこにいるのか。ライル、セファル

「世の光」

ヴァイム、ヘナ、イッヴァの王たちはどこにいるのか。」列王記下 19:10-13

これは、
を攻略し、エルサレムを奴隷化しようとするセンナケリブの計画を、イスラエルの神が阻止できるかどうかに対する直接的な挑戦であった。預言者イザヤ書の助言に従い、ヒゼキヤ王は神に切に祈り、こう言った。

「イスラエルの神、主よ。ケルビムの間に御座を置かれる方よ。地上のすべての王国を治める神は、あなたただお一人です。……主よ、生ける神を嘲るためにセンナケリブが送ってきた言葉を聞いてください。主よ、アッシリアの王たちがこれらの国々とその土地を荒廃させたのは事実です。彼らはそれらの神々を火の中に投げ込み、滅ぼしました。それらは神ではなく、ただ人の手によって造られた木や石に過ぎなかったからです。

今、主、私たちの神よ、どうか私たちを彼の御手から救い出してください。そうすれば、地上のすべての王国が、主よ、あなただけが神であることを知るでしょう。」列王記下 19:15-19

主はこの祈りに、預言者イザヤ書を通して答えられ、預言者と王に、「わたしのため、またわたしのしもべダビデのために」確かにエルサレムを守ると約束されました。さらにこう記されています。

「その夜、主の御使いが出て行き、アッシリア人の陣営で18万5千人を打ち倒した。朝早く起きると、見

よ、彼らは皆、死体となっていた。そこで、アッシリアの王センナケリブは引き上げ、ニネベに戻ってそこに留まった。」列王記下 19:20,34-36

バビロンにおける神の栄光

主は、ご自身が選んだ民が自分に忠実でなかったため、彼らをバビロンへ捕囚として連れ去られることを許されました。しかし、その中には、捕囚の期間中、主が一人ひとりを証人として用いた、忠実な少数の者たちがいました。

その中でも特に注目すべきは、ダニエルと、彼の三人の若い友人、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤであった。彼らが最初に仕えた「宦官の長」は、彼らの名前をベルテシュザル、シャドラク、メシャク、アベデネゴと改名した。ダニエル書 1:6,7

ダニエル書が王の前で初めて頭角を現したのは、「魔術師、占星術師、呪術師、カルデア人」たちがその試みに失敗した後、主の助けによってネブカドネツアルの夢を思い出し、その意味を解釈することができたときであった。

これは神にとって極めて効果的な証しとなり、王はダニエルに対して、「まことに、あなたの神は神々の神、王たちの主、そして奥義を明らかにされる方である。あなたがこの奥義を明らかにすることができたからである」と認めるに至った。ダニエル書 2:47

「世の光」

その後、ダニエル書はバビロンの全州の統治者、「バビロンのすべての賢者たちの総督」に任命された。ダニエル書は、そこで三人の若い友人のことを思い出し、彼らを自分の補佐役に任命するよう願い出した。この願いは聞き入れられた。

しかし、ネブカドネツアルは、ダニエル書に記されている神が「神々の神、王たちの主」であるという自らの告白を、すぐに忘れてしまった。彼は至高の支配者として認められ、その領土内で自分の神々が崇拝されることを望んだ。

彼は、世俗の支配者としての権威と、民に自分の神々を礼拝するよう要求する権利を象徴する巨大な像を建立させた。そして、定められた合図とともに、王国のすべての役人がこの像にひれ伏して礼拝するよう命じた。従わない者は、燃え盛る炉に投げ込まれることになっていた。どうやら、ダニエル書は「王の門に座していた」ため、この命令の対象外であったようだ。

しかし、彼の三人の友人はそうではなかった。これらのヘブライ人が任命された地位を妬んだ敵たちは、彼らが王の黄金の像の前にひれ伏すという王の命令に従わなかったと告発した。

激怒したネブカドネザルは、三人のヘブライ人を自分の前に呼び出し、その報告が事実かどうかを問い詰めた。彼らは事実であると認めた。そこで王は、彼らにもう一度チャンスを与える意向を示したが、もしそれでも勅令に背くならば、間違いなく燃え盛

る炉に投げ込まれると明言した。すると、シャドラク、メシャク、アベデネゴは王にこう答えた。

「ネブカドネツアル王よ、この件について、我々は王の前で弁明する必要はありません。

たとえ私たちが燃え盛る炉に投げ込まれたとしても、私たちが仕える神はそこから私たちを救い出すことがおできになります。そして、神は陛下の手からも私たちを救い出してくださいます。しかし、たとえ神がそうされなかったとしても、陛下、私たちは陛下の神々を仕えたり、陛下が立てられた金の像を礼拝したりすることは決してないということを、どうか知っておいてください。」ダニエル書 3:16-18

その結果は、誰もが覚えているでしょう。三人のヘブライ人は燃え盛る炉に投げ込まれました。その火は猛烈に燃え上がり、彼らを炉に投げ込んだ王の家来たちは炎を吸い込んで死んでしまいました。しかし、三人のヘブライ人は神の力によって守られていたのです。

その後、王は——おそらく自分の行動が賢明だったかどうか少し不安を感じていたのだろう——炎がやや収まった後、燃え盛る炉の中を覗き込んだ。すると、三人のヘブライ人が生きてだけでなく、彼らと一緒に「神の子のような」第四の人物がいたことを発見した。 (ダニエル書

3:25)。彼らを縛っていた縄だけが燃え尽きていたため、王は彼らが火の中を歩き回っ

「世の光」

ているのを見た。そこで王は彼らを炎の中から呼び出し、こう言った。

「シャドラク、メシャク、アベデネゴの神は、祝福されるべきである。その神は御使を遣わし、御自身を信頼したしもべたちを救い出し、王の命令に背き、自分たちの神以外のいかなる神にも仕えたり拝んだりしないために、自らの身を捧げたのである。それゆえ、わたしは勅令を下す。シャドラク、メシャク、アベデネゴの神に対して不適切なことを口にするあらゆる民、国、言語の者は、四つ裂きにされ、その家は糞溜めとされよう。このような方法で救い出すことのできる神は、ほかにいないからである。」ダニエル書 3:28,29

主がご自分の民のために戦われ、忠実なしもべたちを救い出された驚くべき御業によって、イスラエルだけでなく、しばしば周囲の諸国の人々の目の前でもご自身の栄光を現された、こうした胸躍るような出来事を、私たちはさらに思い起こすことができるだろう。彼らが全能の神の証人であったのは、人々に神の栄光ある御性質を説明したからというよりも、むしろ、神が彼らに対する揺るぎない忠実さゆえに、彼らに御恵みを示されたからである。

「あなたがたはわたしの証人である」

神ご自身が、この見解を私たちのために非常に明確かつ美しく要約して、こう言われています。

「あなたを造られた主、ヤコブよ、あなたを形造られた主、イスラエルよ、こう言われる。『恐れてはならない。わたしはあなたを贖い、わたしの名によってあなたを呼んだ。あなたはわたしのものだからである。』

あなたがたが水の中を通り抜ける時〔紅海を渡ったように〕、わたしはあなたがたと共にいる。川の中を通り抜ける時〔ヨルダン川を渡ったように〕、川はあなたがたを押し流すことはない。あなたがたが火の中を歩むとき、焼かれることはなく、炎もあなたがたに燃え移ることはない。わたしはあなたがたの神、イスラエルの聖なる者、あなたがたの救い主である。わたしはあなたがたの身代金としてエジプトを与え、あなたがたの代わりにエチオピアとセバを与えた。」

「わたし、まさにわたしこそが主である。わたしのほかに救い主はいない。あなたがたの間に異教の神が一人もいなかった時に、わたしは告げ、救い、示した。それゆえ、あなたがたは、わたしが神であることを証しする者である、と主は言われる。」イザヤ書 43:1-3,11,12

この啓示に満ちた章の間の節において、主は、御自分の民イスラエルに対する将来の御業もまた、御自身の栄光を証しするものであることを示しておられる。

6節と7節にはこう記されている。「わたしは北に『放せ』と言ひ、南に『妨げるな』と言う。遠くからわたしの息子たちを、地の果てからわたしの娘たち

「世の光」

を連れ戻せ。わたしの名によって呼ばれる者すべてを。わたしは彼らをわたしの栄光のために創造し、形造り、また造ったからである。」

これは明らかに、現在進行中の、散らされたイスラエルの再集結を指しているようです。これが現在の時代の終わりに起こることを示す預言は数多くあります。その一つを引用して確認しましょう。

「見よ、主はこう言われる。やがて、『イスラエルの子らをエジプトの地から導き出した主は生きておられる』とはもはや言われなくなる。その代わりに、『イスラエルの子らを北の地から、また主が彼らを追い散らしたすべての地から

導き出した主は生きておられる』と言われるようになる。そして、わたしは彼らを、彼らの先祖に与えたその地へ再び連れ戻す。

見よ、わたしは多くの漁師を呼び寄せ、彼らが彼らを捕らえるようにする、と主は言われる。その後、わたしは多くの狩人を呼び寄せ、彼らが彼らを狩るようにする。」エレミヤ書 16:14-16

過去一世紀の間に、アブラハムの肉的な子孫の多くが、神への愛ではなく国家主権への渴望に駆られて、不信仰のうちに約束の地に戻ったという事実が、これらの素晴らしい預言の成就が始まったことを否定するものではない。なお、諸国からのこの脱出は、出エジプト記からの脱出に例えられていることに留意すべきである。

当時、その動機は奴隷状態からの脱出であり、彼ら

が40年間荒野をさまようことになったのは、信仰の欠如と神に対する反逆のせいでした。

彼らが不信仰のうちに再集結することを我々が予想すべきであることは、エゼキエル書20章33～37節の預言によって明確に示されている。そこには次のように記されている。

「主なる神はこう言われる。『わたしは生きている。まことに、力強い御手と、伸ばした御腕と、注ぎ出された怒りをもって、あなたがたを治める。そして、力強い御手と、伸ばした御腕と、注ぎ出された怒りをもって、あなたがたを諸国民の中から連れ出し、あなたがたが散らされた国々から集める。そして、わたしはあなたがたを諸国民の荒野へと導き入れ、そこで、顔を合わせてあなたがたと論じ合う。……また、わたしはあなたがたを杖の下を通らせ、契約の絆へと導き入れる。』

イスラエルが故郷の地に戻り、国家として再建されるというこの預言には、いくつかの重要な事実が示されている。その一つは、神がそれを成し遂げるために「怒り」をもって彼らを治められるということである。この表現は、神への愛に動機づけられて自発的に帰還する民の様子を描写しているわけではない。彼らはまず「民の荒野」へと導かれる。この表現は、帰還した捕囚たちが、しばらくの間、周囲の世界と同じような混乱と不信仰の状態にあることを示している。

神は彼らに「顔を合わせて」懇願される。もし彼ら

「世の光」

が心から神に帰依し、イエスを救い主として受け入れていたならば、神が彼らに懇願する必要などなかったはずである。

彼らが神の懲罰の「杖」の下をくぐらされた後、ついに「契約の絆」へと導かれる。

これは、彼らが最初に故郷の地に戻された時点では、まだ神との契約関係にないことを示しています。エレミヤ書31章31～34節は、主が「イスラエルの家とユダの家との間に新しい契約を結ばれる」時が来ることを告げています。しかし、それは彼らが懲らしめの「杖の下」に置かれ、主の栄光を仰ぐために目が開かれるまでは実現しません。

エゼキエル書第38章と第39章の預言は、これがいつ起こるかについての手がかりを与えてくれる。明らかに、イスラエルは現在よりもさらに強固に確立され、繁栄した国家となり、北やその他の地域から侵略者の大群を引き寄せて攻撃を仕掛けさせるほどになるだろう。神は、この攻撃において、古の時代と同様に、再び御自分の民のために戦われるのである。

この預言によれば、神はイスラエルの敵の指導者に対して、「疫病と血をもって」介入し、「彼と、その軍勢、そして彼と共にいる多くの民の上に、あふれんばかりの雨と、大きな雹と、火と、硫黄を降らせる」とあります。エゼキエル書 38:22

その結果、諸国の民の目が開かれ、神の栄光を認めることになる。それだけでなく、エゼキエル書39章7

節には、「こうして、わたしはわが民イスラエルのただ中で、わが聖なる御名を明らかにする。もはや、彼らにわが聖なる御名を汚させることはしない。そして、諸国は、わたしがイスラエルの聖なる方、主であることを知るようになる」と記されている。

このように、神が過去にイスラエルに対して行われた驚くべき御業によって御名の栄光を現されたように、将来もまたそうなるのである。こうして彼らは引き続き神の証人となるだろう。それは、彼らが神の御性質の美德を熱心に知らしめるからではなく、かつてそうであったように、神が彼らを守り、救い出し、彼らの罪を赦してくださるからである。この点に関して、主はさらにイスラエルにこう宣言される。

「あなたがたは、わたしのために香りのよいカラスモを買ってこなかったし、犠牲の脂肪を惜しみなくささげもしなかった。しかし、あなたがたは自分の罪でわたしを重荷とし、自分の過ちでわたしを疲れさせた。わたし、まさにわたしこそが、わたしのためにあなたがたの背きを消し去り、あなたがたの罪をもう思い起こさない者である。」イザヤ書 43:24,25

使徒パウロは、「異邦人の数が満ちる」後にイスラエルが神との契約関係に復帰することを预言する際、この考えをさらに詳しく述べています。「こうして、イスラエル全体が救われることになる。聖書にこう書かれているとおりである。『救い主

「世の光」

はシオンから来られ、ヤコブから不敬虔を退けてくださる。』そして、これが、わたしが彼らの罪を取り除くとき、彼らと結ぶわたしの契約である。

福音の点においては、彼らはあなたがたのために敵となっています。しかし、選びの点においては、先祖たちゆえに愛されているのです。なぜなら、神の賜物と召しは取り消されることがないからです。

かつて神に不従順であったあなたがたが、彼らの不従順の結果として今や憐れみを受けたのと同様に、彼らもまた、神があなたがたに示された憐れみの結果として、今や憐れみを受けることができるように、今は不従順となっています。神は、すべての人を不従順の状態に置かれたのは、すべての人に憐れみを施すためなのです。

ああ、神の富と知恵と知識は、なんと偉大であることか。神の御決定と御業を、私たちが理解することなど、いかに不可能であるか。」ローマ人への手紙 11:26-33

何世紀にもわたる忍耐強い待ち望みの後——その間、主は諸国に散らされたイスラエルを懲らしめられてきた——主は彼らを御自身のもとに連れ戻し、彼らと契約の関係を結ばれる。パウロは、これが「死からの命」をも意味することを私たちに告げている。

イスラエルのすべての人々、すなわち生者も死者も、再び主によって用いられ、彼ら自身とすべての国々に対して主の栄光を現す手段となるでしょう。彼らは再び主の証人となるのです。たとえ、主が説明

されているように、この目的のための彼らの貢献の一つが、主の憐れみと愛を行使することを必要とした彼らの罪であったとしても。

イエスの証人たち

福音の時代において、神の栄光の光は、まったく異なる形で現されてきました。

イエスが「あなたがたは世の光である」と言われたとき、それは弟子たちに向けられた言葉でした（マタイによる福音書5:14）。

神が選ばれた民を保護し祝福し、その敵を懲らしめるために、奇跡的に御手を現された時代は、急速に終わりを迎えつつありました。わずか数年後、神の象徴的な民は、「あなたがたの家は荒れ果てたまま、あなたがたに任される」という運命的な言葉を耳にすることになりました（マタイによる福音書5:14）。その後、神の光は他の経路を通じて、また異なる手段によって輝き出すこととなりました。

この新たな体制において、イエスは指導者であり、指揮官であり、先駆者であった。イエスのご自身について、「わたしは世の光である」と宣言された。

（ヨハネによる福音書8:12）。イエスは、ご自身がこの世に留まることはなく、ご自身に託された神の働きが、ご自身の代表者——すなわち使節たち——によって引き継がれることを知っておられました。ヨハネの黙示録20章4節では、彼らは「イエスの証しと神の言葉のために首を切られた者たち」と呼ばれています。

「世の光」

この表現は、殉教、すなわちイエスと神の言葉に仕えるために命を捧げることを指しています。福音の時代において、忠実さは死へと導きますが、私たちは「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える」という約束によって励まされています。ヨハネの黙示録2:10

この時代の初めから、使徒たちの生涯を通じて、神の栄光を示す奇跡が行われました。イエスは病人を癒し、死者をよみがえらせました。使徒たちも同じことを行いましたが、彼ら自身は死んでしまい、その様子を見ていた人々には、この点において彼らの生涯に神の介入や御手配があったという証拠は与えられませんでした。イエスは死からよみがえりましたが、弟子たち以外の

、それを信じた者はほとんどいませんでした。

ペンテコステの日に、待ち望んでいた弟子たちの上に聖霊が注がれましたが、敵対者たちは、自分たちの目の前で見たことや聞いたことを、神が彼らの事柄に介入された証拠として受け入れることを拒みしました。その代わりに、彼らは弟子たちが酔っているのだと非難したのです。

使徒たちが眠りについた直後、神の保護と愛を示すあらゆる奇跡的な現れは止み、それ以来、この時代を通じて主の民は、完全に信仰によって歩むよう求められてきました。

彼らがイエスの証人となってきたのは、神の恵みが奇跡的に彼らに現れたからではなく、パウロが「救いへの神の力」とであると断言する「キリストの福音

」を忠実に宣べ伝えてきたからである。（ローマ人への手紙 1:16）

イエスが彼らに与えた使命は、福音を宣べ伝えることによって、全世界で主の証人となることでした（マタイによる福音書28:19；使徒言行録1:8）。過去の時代、主の民が主の証人と呼ばれたのは、神が彼らに対して奇跡的な御業によって御自身の栄光を現されたからでした。

福音の時代において、イエスのために証しをする者たちは、イエスがこの世に遣わされて実行するために来られた、人類の救いに関する驚くべき計画を宣べ伝えることによって、その証しを行う。この福音を宣べ伝えるにあたり、彼らはイエスの復活という偉大な奇跡について語るだけでなく、イエスと共に生き、共に治めることになる者たちの復活という奇跡についても語る。

さらに、完全な福音のメッセージは、すべての死者の復活、そして、進んで従う者たちが地上で人間として完全な生命に

回復されるために必要となる、その偉大な未来の奇跡についての宣言を求めています。これらの奇跡に関する事実を宣べ伝えるにあたり、イエスの証人たちは、過去に何が起こったかという知識によって力を得ています。

彼らは、イスラエルをエジプトから救い出し、紅海を安全に通り抜け、ヨルダン川を渡ってカナンでの勝利へと導き、天使を遣わして一夜のうちにアッシリア軍を滅ぼし、三人のヘブライ人を燃え盛る炉か

「世の光」

ら救い出した神が、全人類を罪と死から救い出すことに関するすべての善き約束を、十二分に果たす力をお持ちであることを知っている。

イエスを証しするこれらの人々のうち、実際にイエスを見た者はほんの一握りに過ぎませんが、彼らは、イエスが死からよみがえられたという事実を証言する人々の証言を信じています。また、彼らは、イエスが死からよみがえられたとき、天使や支配者、権威、そして名付けられるあらゆる名よりもはるかに高く上げられ、高き御方の右の座に着かれたというパウロの証言も信じ、宣べ伝えています。

（エペソ人への手紙

1:18-

23）。また、彼らは、最終的に「すべてのひざがひれ伏し、……すべての舌がイエス・キリストを主であると告白し、父なる神の栄光となる」と宣言するパウロのさらなる証言も受け入れ、宣べ伝えている。（ピリピ人への手紙 2:9-11）

イエスのこれらの証人たちは、神の計画において、御子の使節としてこの立場に立つことを喜んでいる。なぜなら、彼らは父を敬うのと同様に、御子を敬うという神の命令に従うことを喜びとしているからである。実際、彼らは、御子を通してでなければ、父を全く敬うことはできないと悟っている。

（ヨハネによる福音書

5:23）。彼らは、復活し栄光を受けたイエスを尊び礼拝し、その証人として仕えることが、神の栄光を損なうものではないことを知っています。なぜなら、御子を御自身の右の座というこの高い地位に高め

たのは、父なる神の力であったと悟っているからです。

「イエスの証人として、また神の御言葉のために」、彼らは唇に賛美の歌を乗せて歩み出します。それは、イエスを世界の贖い主であり救い主として遣わしてくださった神の愛に対する賛美です。

彼らは、このような愛に満ちた救いの計画を立てられた神の神聖な知恵を賛美し、また、罪人を無罪とすることはできなかったものの、贖い主の血によって彼らの罪を洗い流す備えをなされた神の正義を賛美する。彼らは、神の栄光に満ちた御旨のあらゆる側面が実行され、確実に成し遂げられる神の力を賛美する。

彼らは感情的に「主を賛美せよ！」と叫びながら歩き回るわけではありません。しかし、贖い主であるキリスト・イエスを中心とする神の愛に満ちた計画を人々に知らせることによって、神を賛美し、尊びます。彼らは、神の聖霊が彼らにイエスの証人となる権威を与えてくださったことを喜びます。

彼らは、イエスの御国の霊的な段階において、イエスと共に共同相続人となるよう招かれた人々に関わる神の計画を説明し、また、キリストの千年の統治の間に全人類に与えられる「回復」という栄光に満ちた希望を宣べ伝える権能を与えられたことを喜びとしています。

改心しなかった世界

「世の光」

イエスの証人たちによって時代を通じてなされてきたこの栄光に満ちた証しは、世界を回心させることはなかったし、今となっては世界を回心させることもないでしょう。

それが神の計画ではなかったのです——神の御心は、この証しの働きの主たる成果が、この特別な階級に加わり、キリストと共に生き、統治するにふさわしいと証明される人々への働きかけと育成にあることでした。

ちなみに、他の人々もこのメッセージを聞き、ある程度は祝福を受けてきた。それゆえ、彼らはミレニアム期間中に世界にもたらされる王国の祝福に向けて、ある程度準備が整えられてきたのである。また、何百万人もの人々がこのメッセージを聞いたものの、それに注意を払わなかったが、それでもこのメッセージは彼らに対しても証しとなっている。

イエスは、「この御国の福音が、すべての国々への証しとして全世界に宣べ伝えられる。そして、その後〔福音時代の〕終わりが来る」と語られました。マタイによる福音書24章14節

イエスは、ご自身の個々の証人たちを、暗闇の中で輝くろうそくに例えられました。ろうそくの光が暗闇の中でそれほど遠くまで届くものではないことは、私たちも知っています。その光は、すぐそばにいる人々にのみ益をもたらします。同様に、イエスの証人たちを通して輝く福音の光は、信仰と献身によってその光、そしてそれが象徴する主に近づく人々にとっては導きであり、大きな祝福ですが、外の世

界からは、ぼんやりとした微かな光にしか見えません。

ある人は、イエスの証人たちを通して輝く福音の光は、海の端にある灯台のようなものと述べています。それは海を照らすために置かれているのではなく、船乗りを導くためにあるのです。したがって、福音の時代において、真理は世を照らすことはありませんでした。たとえそれが世における唯一の光であったとしても。しかし、この光は、主ご自身の民にとっての導きとなり、彼らが「栄光と誉れと不死」へと続く「狭い道」を見出し、その道を歩むことを可能にしてきたのです。ローマ人への手紙 2:7

「太陽のように」

現在の時代のイエスの証人たちを通して、福音は「終わり」——すなわち時代の終わり——が来るまで宣べ伝えられます。

イエスの「麦と毒麦」のたとえ話も、世の終わりについて語っています。このたとえ話の中で、イエスの証人たちは「御国の子供たち」と呼ばれており、収穫の業が完全に成し遂げられたとき、これらの「御国の子供たち」は、「父の御国で太陽のように輝き出す」とされています。マタイによる福音書 13:38,43

この「太陽のように輝く」ことは、預言された「義の太陽」であるイエスと結びついて起こるものであ

「世の光」

り、イエスは「その翼に癒やしを携えて」現れ、全人類の世界を照らし、祝福するのです（マラキ4:2）

。イエスの証人たちは、勝利の教会として共に、その「義の太陽」の一部となり、イエスと共に、神の栄光の知識が「水が海を覆うように」全地を満たすようにするでしょう。イザヤ書11:9、40:5

このように、イエスが山上の説教を語ったごく少数の弟子たちに「あなたがたは世の光である」と言われたとき、それは最終的に、彼らが単に「世の中に」ある光以上の存在になることを意味していたことがわかります。彼らがこれまで光を輝かせてきたのは、後者の、限定的な意味でのことでした。これは彼らに熱意や情熱が欠けていたからではなく、人間の限界によるものです。

イエスが説明されたように、この世の闇は光を憎む。それゆえ、闇の中に住む者たちは、たとえ光を見ても、たいていはそこから背を向けてしまう。このことには、サタンが大きな責任を負っている。この世の神として、彼は信じない者たちの心を盲目にし、「神の御姿であるキリストの栄光を現す福音の光を見ることができないように」しているのだ。コリントの信徒への手紙二 4:4

「義の太陽」が「その翼に癒やしを携えて」昇り、「御国の子ら」が彼とともに輝きを放つとき、サタンは縛られ、「もはや諸国民を惑わすことはできなくなる」のである。（ヨハネの黙示録 20:1-

3)。こうして、「闇」の支配者（エペソ人への手紙 6:12）がその栄光に満ちた「太陽」から放たれる光の輝きを妨げることを阻まれることで、全世界の人々は、真の神であるエホバと、彼らが生きるために死なれたその愛する御子とを知る絶好の機会を得るでしょう。

そうして、イエスがすべての人の身代金としてご自身を捧げられたというその偉大な真理が、すべての人に証しされることになるでしょう。テモテへの手紙第一 2:4-6

全人類を啓蒙するこの働きには、キリストの王国の千年の期間が必要となる。まず、生きている世代は、預言者ゼファニヤが言及した「清い言葉」を授かることになる。（ゼファニヤ書 3:8,9）。これは、「[神の]嫉妬の火」が、大いなる「国が生まれて以来かつてなかったような苦難の時代」において、象徴的な地球——すなわち現在の邪悪な体制——を滅ぼした直後のこととなる。ダニエル書 12:1

その「火」を経験する多くの人々は、真の神についてほとんど無知であるため、「心をつにして」神を正しく知り、仕える機会を得られるよう、純粋な真理のメッセージが彼らに伝えられる必要がある。しかし、それはほんの始まりに過ぎない。

その後、すでに亡くなった何十億もの人々が目覚めることになる。これらの各世代が、墓から彼らを呼び出す主の声を聞くにつれ、彼らもまた啓発される必要があるだろう。したがって、「太陽」は千年王

「世の光」

国の間ずっと輝き続けるものの、罪と死の長い夜の闇がすべての人々の心から完全に追い払われるのは、その終わりが近づく頃になってからである。

預言者ゼカリヤは、このことを美しく例えて示しています。彼は、キリストの千年の統治——「義の太陽」が輝き続けるその期間——を「一日」として語っています。彼はこう言います。「それは、主のみが知っておられる、唯一無二の日であり、昼と夜の区別がない。夕暮れになっても、光がある。」ゼカリヤ書14章7節

「その日、エルサレムから生ける水が流れ出る」と預言者は続けます（ゼカリヤ書14:8）。この「川」は、ヨハネの黙示録22:1、2において、「神と子羊の御座」から流れ出ていることが示されています。川の兩岸には、必要なすべての命を与える実を結ぶ象徴的な「命の木」があり、「その木の葉」は「諸国民を癒やすため」である。その時、「御霊と花嫁」はこう言うだろう。「来なさい。……命の水を自由に受けなさい。」ヨハネの黙示録22:17

このように、この美しい象徴の組み合わせの中に、現在のイエスの証人たちの将来の働きが描かれている。現時点において、私たちが完全に信じるすべての人々に伝えるメッセージは、自分の十字架を背負い、イエスに従って

死へと向かうことである。この忠実な者たち——キリスト、頭と体——を選り分ける働きが完了し、神の計画に関する光が全人類に明らかにされたとき、

すべての人々への招きは、「さあ、来なさい。……
いのちの水を自由に受けなさい」となるだろう。